



題字 林 邑一

第 12 号
平成 3 年 3 月 31 日
阿品台地区
コミュニティをすすめる会
阿品台公民館
(TEL39-4338)
阿品台人口世帯数
平成 3 年 3 月 7 日現在
人口 男 5,662 人
女 6,113 人
世帯数 3,384 世帯



「花の心、日本の心」

講演会開催

講演 花芸安達流主任教授

池田明子 先生

文化部・婦人部共催
三月十三日阿品台公民館



講師 池田明子先生

「花の心、日本の心」

今日の標題は、「花の心、日本の心」ということで、私がやっているのは「花芸安達流」という日本の生け花なので、生け花を通してのものの見方、考え方を話してみたい。

私、生け花を教えているが、三十才代はいつもジーンズをはいて飛び回っていたので、名刺を出すと「生け花をやっているんですか」とみんな意外な顔をする。

今の男性は、お茶をたしなんだり、関心をもつ者は結構あっても生け花をやる人は少ない。男性の約八割は「生け花は分らない。」という。残る二割のうちの半数は園芸等を通じて少々関心をもっている。残りの一割は「生け花よりも、野辺の自然に耐えて咲く花の方が好き。」という。この言葉こそ、生け花をやっている者にとって非常に貴重な言葉である。

○ 花の生命

日本の生け花の大きな特質というところ、「自然に耐えている生命あるものの存在」ではないか。花の生命を知らずして花を生けることはできない。

安達瞳子先生七才のとき、お父様から花鋏みを手渡されて約束したことは、「花を切るたびに花に謝れ。」であった。そこで瞳子先生約束どおり「カッチン」「ごめんなさい。」「チョッキン」「ごめんなさい。」と花に謝りながらけいこをしたそうだ。

ところが、或る日お父様が、白菜の漬物をバリバリと音をたてて召し上っているのを見て、「なんだ、お父さんは花を切るたびに花に謝れと言いがら、植物を謝りもしないでバリバリと食べるじゃないか。」と、そこで瞳子先生私は華道家にはならないぞ、園芸家になろう。と思ったそうだ。

私達いつも、花を切るたびに花に謝り、そして限りある生命を最大限に生かそうと自分自身に言い聞かせながら生けるのである。

この花の生命、生け花のルーツ

と大いに関係があると思う。生け花のルーツには神道と佛教の二つのルーツが考えられている。

高い樹木（常緑樹）に神様が降りて来る、その樹が生け花になったという。もう一つは佛前に供える花である。光明皇后の歌にこんなが残っている。

わがために 花は手折らじ

されどただ

三世の諸佛の前にささげむ

三世とは、前世、現世、来世のこと、

いましめていることは、「耳をすまして花の声を聞け。」ということ、花自体が美しく、自然に耐えたそのままだ姿が美しく、手を加えない方がよいくらい、若しも花に口がきけたら「あなたの生けたこんな私が好きよ。」と言ってくれるような花を生けたいもの。

一休さんの歌に、日本の感覚を表現したこんな歌がある。

心とは いかなるものを 言うならむ

墨絵にかきし 松風の音 風の音は絵に書けないが、描かれた松の小枝から風の音が感じられる。それが心である。と言う意味の歌であらう。

○ うつろいの美学

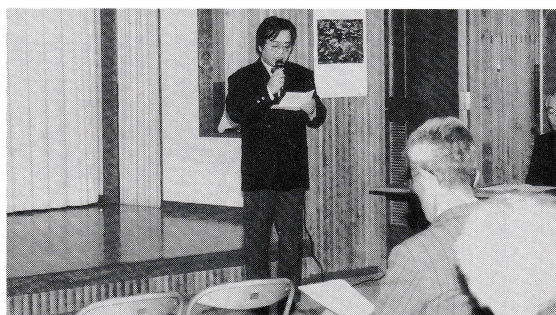
こうして、日本に古くから木や花を生命あるものとしていつくしんできたのは、日本の自然が美しいからで、人にやさしい自然であり、人と一体化した自然であり、四季折々に表情を変える自然だからである。

作家川端康成が、ノーベル文学賞受賞記念講演「美しい日本の私」の冒頭に掲げた歌に

春は花 夏はととぎす秋は月

冬雪さえて 冷しかりけり

これは四季の心に浮ぶものを並べただけの単純な歌ではあるが、講演の冒頭に掲げたということは、



開会のあいさつ 文化部長 平田文孝先生

う自己満足のために花を折るのではなく、佛に捧げるために花は折るのだという意味である。

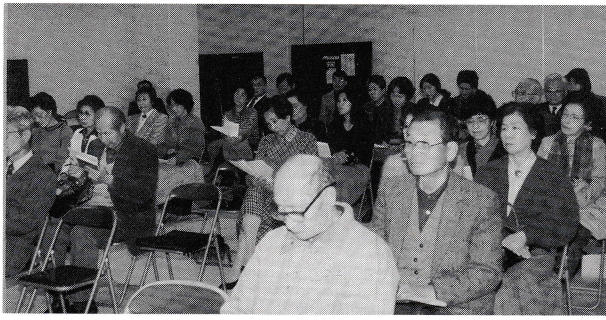
私達の生活の中で、私達が一番

彼の文学を感じていたものは、四季折々に美しい自然にあった。その美しい自然へ感謝の気持ちを捧げたのがこの歌ではないか。

これと似た歌で、子供達と手まりをついたやさしい良寛さん辞世の歌にこんなのがある。

形見とて 何か残さむ春は花

山ほととぎす 秋はもみじ葉
もう、そろそろ花だよりを聞く季節が近づいたが、私達が桜の花に心をひかれるのは、非常に短い期間に咲いて散ってゆくからで、新古今集春の歌に桜を歌ったものが六九首、その中の四五首が桜が散ること、散るのを惜しむ歌である。



熱心に耳を傾ける出席者

よく、「生け花は、残らないから気の毒だ。」と人はいう。絵でも彫刻でも、芸術品はこわさない限り後世に残るが、生け花は残らない。生け花の見ごろはほんの束の間である。そこに、生け花の真髄があるのではないか。

洋の東西ということで庭の形を眺めてみたい。ベルサイユ宮殿の庭の石は、三角に或いは四角にカットされ、模様を描いたようにきれいに配置されているが、あの庭はどこから眺めると一番よいかという、二階バルコニーから見下ろすのが一番よいといわれる。

ところで日本の庭はどうかという、日本の庭は、どこから見るのがよいというものではなく、そぞろ歩きの中から、四季折々に移り変わる姿を自分の心に合せて庭をとらえるということ、もっと極端な例をあげるなら、京都竜安寺の石庭である。あの石は一五並べられているが、これを同時に全部眺められる場所はなく、いつもどれかがかくれて見えなくなる。ということは、場所をかえて見ることによって風景がかわる。視点が変わるということ、あの庭をつくった人は教えているのではないか。じっと同じ場所で見るとは全く位置をかえ、心をかえながら見るということをお教えされているよう

な気がする。

○ 否定の美学

さて、最後に日本の生け花の特質を強調するならば、少ない花材により多くを表現するということだろう。

池坊専応の言葉に、「小水尺樹をもって江山数程をあらわす。」ということがある。少ない水、小さな樹で大きな自然を表現するという意味で、これぞ生け花の真髄である。

広島というところは自然に恵まれており、歴史的な宝も一っぱいあり、余りにも豊かであるが故に宝の持ち腐れではないかと思われる。私達日本人は、宝の持ち腐れというよりも、少い材料で多くのものを享受してきた民族ではないかと思う。

もう一度日本の心を見直してみたい。私も一つしよに学んでゆきたいと思っています。

御静聴ありがとうございました。

ございました。

プロフィール

昭和二十一年五月二六日金沢市生まれ
昭和四十二年三月金沢女子短大卒業
昭和五五年六月から

広島市公共建築物デザイン
審査会委員



「ふれ合い広場」 ジャンケン坊や

朝の通勤途上の出来事、通学途上（西小学校）の子供たちとの束の間のふれ合いを紹介してみましよう。

毎朝のように電停までの途中、西小学校の小学生三〜四人と出会う。この小学生達よくあいさつのできる子で、出会うと必ず「おはよう。」のあいさつを交わす。非常に感じがよく、すがすがしいさわやかな気持ちにしてくれる。こうなると毎朝の出合いがたのしみになるものだ。

昭和五七年二月から
広島市都市美化委員会委員
昭和五七年九月から
花芸安達流主任教授
昭和五八年十月から
中国新聞文化センター講師
昭和六一年四月から
頼山陽遺蹟顕彰会評議員
平成二年五月から
広島銀行経済研究所理事
平成二年六月から
広島市優秀建築物表彰
選考委員会委員等々

（一部割愛しました。）

著書に

「今日を語る

素顔の広島経営者たち」
（中国新聞社刊）がある。

〈広報部〉

そしたら、他の子供達も次々に

僕も僕もと三、四人いた子が順次挑戦してきた。結果は五分五分だったと思うが、勝った子の嬉しそうな顔、負けた子のチョッピリしよげた顔、いづれにしても、こちらは勝っても負けてもさわやか気分にしてくれる。それ以来、出合うと必ず「おはよう。」のあいさつに続いてジャンケンポンと一勝負しないといけないことができない仲間になり、毎朝の出合いがほんとうにたのしみである。近くでこの光景を見ていたお孫さんを背負ったおばあちゃんが、

「まあ、面白い子…あなたも、また、よう一人ひとりの相手をしてあげてじゃけん、子供らも喜んで…」

「毎朝この調子ですよ。」

「まあ、面白い、それじゃ毎朝がたのしみでしょう。ええことですのー。」

ほんとうにたのしみだ。出合わない日は、あの子達、今日はどうしたのかな?、「今日はおそいかな?」と気にかかる。或る朝のこと、面白いことがあった。

今朝は子供達の道がちがつて田んぼの向うの道を通っている。今朝は離れているから互いに見て通るだけかと思いきや、田んぼの向うからいつもの「おはよう。」の

大きな声がかかってきた。やあ! 嬉しいではないか、遠くからでも声をかけてくれるとは、早速「おはよう。」を返すと、こんどは、「ジャンケン」と言って手を上げているではないか。ジャンケンと言っても「グー」だか「チョキ」だかわからんじやないか。手先が識別できないような距離でどうするんだろうか。まあ、せっかくの挑戦だから応えなくっちゃあと思って「ジャンケンポン」とやってはみたが、相手は何を出しているのかわからない。すると、向うの一年生坊主大きな声で

「僕グー、おじさんは?」

ときた。そこで私は「チョキ」と言つてやればよいのに、「パー」だったから正直に「パー」と返してやつたら

「ああ、負けた。」

そしたら、他の大きい方の子が、「お前は馬鹿じゃのー、お前の方を先に言うけん負けるんじや、おじさんが何を出したんか先に聞けえやあ、馬鹿じゃのー。」

まあ、ザットこう言つた、漫才か落語のネタにでもなりそうな一コマである。

この子達と、初めての出会いの時の一年生が、今では三年生だから約三年間続いたことになる。ところが、最近この子達と出合わない

くなって、チョッピリ淋しい思いをしている昨今である。寒いから家を出るのがおそくなったのかも知れない。春がきて暖くなり、この広報紙が各家庭に届く頃には、また、あの子達とジャンケンができるかも知れない。

このように、子供達はよくあいさつができるのに、大人となるとなぜ声がかからないんだろうか。よほどの顔見知りでない限り、声をかけないのはどうしてだろうか。同じ地域に住む者、もっと声を掛け合いたいものである。

〈広報部〉

廿日市市青少年育成委員会
市民会議入選標語

あいさつで ふくらむ

人の和 地域の和

(地御前五丁目奥野法保作)



「ゆずり合いの席」

「電車内の迷惑」

あなたに心当たりは?

混雑する電車内で、大また開きで二人分の席を一人占めして素知らぬ顔をしている人、座席に荷物を置いておしゃべりに夢中の人、わずかなスペースにお尻をねじ込んでくる人、電車内で、こんな光景に出くわした経験はありませんか。

或る大学の教授グループが、都市近郊の電車の中で乗客の行動を調査し、その結果を人類動態学会で発表されていたので、その中から興味ある身近な例を引用しながら、私達日頃の経験を交えて二、三の事例を紹介してみよう。

この調査のきっかけは、この大学の教授が、たまたま乗り合せた満員電車で、大人七人は掛けられる席を、男性四人が見事に占領しているのを見かけたことから、広く乗客の観察をしてみようということから始まったという。

この調査は、まず乗客を男女別に青年、中年、高年の六つのグループに分け、行動ごとにその特徴を調べたものである。

青年と中年の男性は、座ってか

らの行儀が際立って悪いのが目につく。一人分以上の座席を占める「席占抛人」、両側の人に不愉快な思いをさせる「迷惑人」の両者では、共にトップを争い、両者を合せると七十%を超えたという。

おじさん達に多いのは「大また開き」、これは、広電宮島線によく見かけるスタイル、「あんなに広げなくてもよからうに。」と思うことたびたびである。

大また開きでカバンを座席にというのをよく見かける。これも宮島線のこと、高校生三人が並んで席を陣取っている。カバンは座席に置いて大また開き、立っている人も可成りいるが誰も注意する者はなく、やがて目的地に着いてこの三人が降りて行ったら、そのあとへ大人五人が座ったから驚きである。これはちょっとひどい例ではあるが、これに注意する者もいないというのも情けないこと。今頃は、うっかり口出ししようものなら手痛い目に合い、運の悪い人は一命を落したという例もあるからだろう。

次に座席への割り込みである。

何らかのサインをしないと入れない狭いところへ座った、いわゆる「割り込み型」は七%、その中で多かったのは中年女性で四〇%を占めていたという。ただし、これ

には、「中年になると、筋力が落ちる一方で脂肪は増える、荷物は重い、いきおい、ドカッと座り込むのも無理からぬこと。」と同情的な弁護がついている。

座席への割り込みの仕方には、①会釈をして、②やや強引に押しやる、③声と動作が同時にの順、にらみつけて圧力をかける怖い型も十人に一人はいたという。

おばあさん（高年女性）は、声と動作の両方できちっと意思表示しているのに対して、男性は、一般的に無愛想な人が多かったそうである。また、席をゆずる人の三人に一人は若い女性で、他のグループよりずば抜けて多かったという。男性は無言でスッと立ち去る人が大部分だそう。

席をゆずるということ、こんな経験はないだろうか。「どうぞ」と言っ立とうとすると、「いいんです。」とすげない一言で断る人、まだひどいのは、「どうぞ」というと「早くよけろ」と言わんばかりに、威張り散らして座る人、どちらも感じのよいものではない。しかし、こんな人ばかりではない。礼儀正しい立派な人に出合ったのは広島市内電車のこと、やゝ混雑した電車で可成り年輩の男性が乗ってきた。「どうぞ、お掛けなさい。」と席をゆずろうとした

ところ、このご老人「やあ、どうもありがとうございます。すぐ次で降りますから大丈夫です。」と丁重に断った。なればと思つてもとの席へついてみたが、この老人次では降りないで、二つばかり停留所を過ぎたところで、わざわざやってくる「先程は御親切にありがとうございました。次で降りますので……どうも、ありがとうございます。」とこれまた丁重なるごあいさつに、ひたすら恐縮した次第、こんな人に出合うと気分は極めて爽快である。

続いては、少数の事例ではあるが新聞を大きく広げて読む人（迷惑人）、隣席の人にも読めとばかりに広げられるのは少々迷惑である。しかし、ちゃんと小さく折たたんで読んでいる人も、結構多いですよ。

ちょっとした気づきや、ちょっとした言葉づかいで人の心は晴れもするし、曇りもするものである。「車内の行動は、人間の情報を提供してくれる大事な信号の一つであり、その人が幸せなのか、疲れているのか、元気なのかなどいろいろ物語ってくれる。」と調査にあたつた大学の教授はいう。

また、この調査から、みんな自分の周囲が見えていない。いや、見ようとしていないのではないか。そ

んな風潮が感じられませんか。今の社会は、できるだけ他人のことは見ないように仕向けているのではなからうか。

ここに、いくつか列挙した事例が、自分の周囲に目を配る一つのインパクトになれば幸いである。

〈広報部〉



家族ニューワード

「シリアル症候群」

カシヤカシヤ・パザパザ・モグモグ……。朝の食事にこんな音が広がっている。

ものである。

〈広報部〉

川柳

（自由吟）山の手 森川拔智作
目の悪い人には大きな字で手紙
もう孫と理屈云うても勝てません
テレビの早口老人にはわかりませぬ
自衛隊出すか出さぬかまだ揉める
童謡を聞けば爺やも若返る
拝啓と書けば固苦しくてあと書けぬ
万歩計バンドにつけたまゝ昼寝
もう何も云うことないかと電話切る

〈編集後記〉

僅か二回の発行であつたが、やれやれ終つたというのが実感である。阿品台に住む友人知人に、コミュニティの広報紙「ふれあい」を読んだことがあるか聞いてみたが誰も読んでいないのにはがっかりした。それは何故か、工夫が足りないからよ、それならどうすればよいのか、そいつがわかれば苦労はない。これは新年度の広報部にお任せします。読んでみようと思ふ気持ちにさせること。それができなかった。ごめんなさい。

〈広報部・竹下〉